町民文芸

只見短歌会

四月詠草

大塚栄一　指導

朝早き土手を前のみ見つめつつ急ぎ足に行く人とまた会ふ　皆川　恒子

この春の花見は寒くコート着てだんご食みつつ車中で眺む　吉津　政枝

隣家の合格せしとふ少年にチューリップの花惜し気なく切る　古川　英子

施設より外泊させて妹は短歌の集ひの友らと会はす　五十嵐英子

糖尿と医師に告げられ老いし身に食む事のみの楽しみ消ゆる　馬場　八智

喜寿を祝ぐ同級会の少なくて病める友らや物故者数ふ　渡部ゆき子

芽吹き来し柳に朝日ふり注ぐ山峡の道子と通院す　五十嵐夏美

切干しを広げし莚の温もりにしばし座れば人が寄り来る　目黒　富子

人住まぬ隣家の庭も春となり梅の古木に白き花咲く　齊藤ちひろ

突然に天候変り満開の桜の花を吹雪は覆ふ　渡部ヨリ子

窓近く梯子をかけて娘らはおぼつかなげに冬垣外す　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会

五月例会

目黒十一　指導

痛む肘に浮く葉を寄せて菖蒲の湯　隆堂

百千鳥峠はダムを眼下にす　邦夫

國語辞典いよいよ古び春惜しむ　修一

土蔵より種署出して日に当てり　康女

山静かに桜花芽のまだ固し　一灯

算盤の玉のかがやき春灯　リウコ

クロッカスいち早く咲き風硬し　礼

春雷や山野一夜に雪世界　都

柳萌ゆ小枝のような竿を垂れ　礼

新にしん今宵は母を語り合おう　修一

春空へまっすぐ届く寺の鐘　都

雪解や曲がりし葱も天を指す　一灯

花冷えやカサかざしゆきランドセル　一穂

鷹一羽ひとつはばたき川渡る　一灯

梅ほつほつ朝より雪の飛び荒れて　一穂

春炬燵まだまだ仕舞う気になれず　洋子

遠くより水の輝く春の川　洋子

春の雲隣のじさま笑ったよ　又壱歩

花筏一線引きて船の行く　洋子

餌あさる小鳥雪間を飛び交えり　邦男

雪色のまま立ち上がり水芭蕉　敦子

退院の妻にほころぶ桜かな　邦男

看護婦のタイの衣掌や雪の果　敦子

クロッカスの花すっぽりと春の雪　敦子

遺されし物ふところに青き踏む　吉児

雪消えし玉葱畑青々と　敦子

拍手の千木（ちぎ）にこだまや伊勢参　吉児

玉砂利を踏む九十二翁風薫る　恒夫

早蕨（さわらび）の灰汁（あく）の抜けたる頃合いに　恒夫

蛇の殻手斧削りの太柱　恒夫